

平成 29 年度（通算第 15 回）

国際交流推進協議会

平成 29 年 9 月 13 日（水）  
アルカディア市ケ谷（私学会館 3 F 「富士の間」

V. 事例報告

（2）『モンゴル留学事情』

講 師

駐日モンゴル国大使館  
チュロンバトル・ソロンゴ 氏

## 【ソロンゴ氏】

皆さま、こんにちは。モンゴル大使館からまいりました、ソロンゴと申します。よろしくお願ひします。サインバイノーというのが、モンゴル語で「こんにちは」という意味です。

今日の話の内容は、『モンゴル人留学生の現状』なのですけれども、その話に移る前に、まずモンゴルでの日本語教育史について触れたいと思います。

モンゴルで日本語教育が最初にできたのは、1975です。当時は、モンゴル国立大学文学部に副専攻として日本語コースが開設されたのが、日本語の教育の始まりでありました。今年、モンゴルと日本の外交関係樹立45周年ですから、外交関係を樹立してから3年後の話となります。それで、1990年に日本語が普及し始めました。なぜかという、民主化し、市場経済の移行がありましたので、人々が、発展している日本に興味を持ち始めたことがきっかけでした。

それで、1990年になって、文学部の副専攻だったのが、モンゴル国立大学で日本語学科となって拡大しました。それで、初等中等教育レベルとして、初めて日本語の教育が開始されたのが、第23番学校なのです。ちなみに、その第23番学校の日本語学科を卒業したのが、私なのです。

1990年代からは、日本語に興味を持ち始めるモンゴル人の子どもたち、学生たちも増えました。年々増えて、日本に興味を持ち、日本に留学したいという学生たちも増えました。それで、日本の大学に入学するために必要とされる日本語能力試験も、モンゴルで受けることができるようになりました。しかし、2010年から2012年には、日本語を習う学生たちの数が急激に減ることになるのです。なぜかという、資源価格が高騰し、海外、とくに、オーストラリア、イギリス、カナダからの投資企業がモンゴルで活躍し始めて、それで、日本語を勉強するより、そういった投資会社に就職するために英語を勉強したほうが良いという学生たちが増えて、日本語に興味を持つ子どもたちの数が減りました。その2年の間には、とくに英語や中国語、韓国語を専攻する学生たちの数が増えたのであります。

それが、経済成長ブームが終わり、2014年から現在までは、留学する学生たちの数がまた増えるようになりました。その理由というのが、日本の最初の要件が緩和されたことです。前までは、留学したいが、ビザを申請しても下りないというケースが多かったのが、ビザが緩和し、日本に旅行をする人たちも増えました。それで、日本の文化や日本語に関心を持って、日本語を勉強する子どもたちがまた増えることになったのです。

それで、モンゴルでの日本語の教育の特徴というのが、日本語が活用できる人材が、また増えていることです。それで、高度な日本語が活用できる人がすごく多いです。さまざまな教育機関で日本語を学習する機会を提供することになりまして、これらの学校が、モンゴルで日本語の教育を提供している学校と学生と大学となっているのです。モンゴル国立大学、人文大学、科学技術大学というのが、すごく日本語の教育が良いと、モンゴルで言われているのです。それで、新モンゴル学校と、第23番学校というのが、歴史も長いし、上達していると言われていいます。だいたい、学校では、日本語を最初から、基礎から勉強させるので、日本の文化、文体の翻訳、言語といった分野で詳しく教育を提供しているのが、モンゴルでの教育の特徴となっているのです。

日本に留学するモンゴル人は、日本にとっても親近感を持っているため、日本で留学したいという学生たちが、最近増えています。それで、日本で留学をして、日本の関連企業に就職したいという人が多いのです。それで、留学を終えて、帰国後に、日本とモンゴルの懸け橋になるような仕事に就きたいという学生たちも多いです。

だいたい大学を卒業してからは、必ず、ある程度、日本とのかかわりを持っている仕事に就くのが多いです。たとえば、公務員になったら、日本を担当するというケースも多いですし、ビジネスの現場、現状でも、日本とモンゴルの間でビジネスをしたりという人が多いです。

日本とモンゴルの戦略的パートナーシップというのが2014年に締結されて、戦略的パートナーシップの原則で、今、関係が発展しているのです。その中で、中期行動計画の中に含まれているのが、日本語教育になっていまして、とくに、工学系の人たちを増やそうというのが、今、両国の、モンゴルの政策の1つになっているのです。工学系の学生を増やすことで、モンゴルは鉱物資源を生かす工業分野を成長させるのが1つの目的となっておりまして、それで、工学系の学生を増やすのが政策の1つの課題となっているのです。それで、平成26年から35年まで、約9年間でこのプロジェクトが実施されています。それで、1,000人の工学系の人材育成をするというのが目的となっておりまして、現在は、109人が日本で留学をしています。

今、日本でのモンゴル留学生が非常に増えていまして、現在、約7,000人のモンゴル人が日本に在住している中、その中の約3,000人が留学生なのです。その3,000人というのが、モンゴルは、人口が300万人となっているので、人口に対する国民1人あたりの日本への留学は1位になっています。

それで、やはり、彼らには、数が増えるに従って問題が発生するケースが多いのです。彼らに、留学生に直面する問題の1つというのが、異文化です。たとえば、ほとんどモンゴルで日本語の勉強をしていた学生たちが来たにもかかわらず、最初はカルチャーショックというのが非常にありまして、食事が変わったり、時差があったり、時差といっても、1時間の時差しかないのですけれども、それらがあって、ちょっと困ったりすること、体調を壊したりすることがあるのです。

それで、言葉の壁がありまして、やはりモンゴルで日本語の勉強をしていたといっても、日本人の中に入っていくと、言葉は聞き取れるのですけれども、返すことがなかなかできないのが、1つの壁となっておりまして、それがちょっと良くなってくるのが、3カ月から6カ月たったら、やっとコミュニケーションが取れるようになるのです。それをやっとならば、ホームシックというのがあります。ほとんどモンゴル人の学生というのは、家族体制ですが、日本は大学生になると、一人暮らしになったりするケースが多いのですけれども、モンゴルでは、そういうのがあまりないので、いきなり1人で生活すると、すごく困ったりして、ホームシックになるケースが多いのです。それで、生活費やアルバイトとかの問題も出てきて、言葉があまりしゃべれないから、アルバイトを見つけることができない。ですから、どうやって生活費を成り立たせるかというのが、1つの問題となってくるのです。

それを解決するには、受け入れ側の学校の積極的な取り組みが必要なのです。私も、日本で10年前に留学していた経験がありますので、やはりこれらの問題に直面したことが

ありますので、学校側が、とくに、ゼミの先生がいつも優しく接してくれて、面接というのがよくあったのです。直接会って、これから何をどうしていけばいいか、問題をどう解決していけばいいかというのが、すごく役に立って、無事に、日本での留学生生活を終えることもできましたので、皆さんも、これから、学生の一人ひとりと直接話し合っしてほしいと思います。

それで、もしもの時は、やはり第一には、その国の大使館に、どうやって解決すればいいかというのを、直接相談したほうが良いと思います。とくに、今、領事部というのが、そういうのによく対応してくれることになっています。

その一つは、私も1年前までは、在大阪モンゴル国総領事館にいまして、領事館ですから、事件があったら、直接、そのケースに触れることが多かったのです。それが一番大きく現れるのが、精神的に不安定になって、幻を見るようになったという学生たちが多くいるのです。たとえば、学生が車にひかれそうになったけど、それが全部、彼ら自身が自分の頭の中でのことだったのです。精神的に不安定になっているので。その場合にも、やはり大使館に来て、学校側が大使館と相談して、それを、大使館側が説明してあげたり、「われわれが、常に、あなたの味方ですので」という対応がすごく効いたので、それを学校側にもお勧めしたいです。

もう一つは、留学生向けのイベントというがありまして、そういうのに積極的に参加させたほうが、すごく効果がありました。人と接することによって、言葉も上達してきますし、文化に触れることもありますので、そういうイベントに積極的に参加させるのがいいと思います。

モンゴルの大使館の1つとして、在日本モンゴル人協会というのがありますし、また、留学協会というのがありまして、それに毎年、学生向けのイベントを開催したり、学生向けのスポーツイベントも開催されたりしていますので、それに積極的に参加させることがいいと思います。

情報交換というの、やっぱりありますし、皆さんの学校に、たとえば、モンゴルから留学生が来た場合にも、大使館に、こういう学生が、今年は、モンゴルから学生が何人来ましたというのが、やっぱり必要ですので、大使館に情報提供するのが大事だと思います。

ご静聴ありがとうございます。

(以上)